第３章　考　　察

今回の発掘調査は，高堂太遺跡の２次調査にあたり，南区（2,700㎡）と北区（2,900㎡）の，計5,600㎡が対象となった。その結果，平安時代と中世の遺構・遺物が発見されている。以下では，時代別に調査成果をまとめ，派生する問題を検討していく。

第１節　平安時代の土師器

高堂太遺跡では，平安時代に属する遺物が主体を占める。土師器（赤焼土器含む）が大部分で，少量の須恵器が伴う。遺構単位でまとまった出土例もあるが，器種には偏りがみられるなど，セット関係が捉えにくい遺構もある。そこで，土師器杯の変遷を中心に出土遺物を概観し，周辺遺跡との対比を試みる。

１群土器　ＳＤ20・ＳＫ50出土土器（図48～50・66）を標識とし，ＳＫ34・35・47の遺物をこれに含む。器種は，土師器杯・高台杯・甕・筒形土器・小型鉢，須恵器杯・長頸瓶・短頸壺からなり，数的には土師器杯が卓越し，須恵器の出土数は少ない。

ＳＤ20の土師器杯は内面黒色処理されるもの（Ａ～Ｄ類）と黒色処理されないもの（図48－１）に細分されている。圧倒的に内面黒色処理される例が多く，Ａ類が多数を占める。器形は，体部下半に丸みをもって立ち上がり，口端が内椀気味のものとわずかに外反するものがある。前者は器高の大きい一群に多い。体部調整は手持ちヘラケズリが主で，回転ヘラケズリが少量伴っている。

図81①は口径と器高を計測した図である。口径が12～16㎝，器高が3.5～6.0㎝に納まり，特に口径12～14.5㎝，器高3.5～5.0㎝に集中することが分かる。口径14㎝を境に大小に分けられ，小型の杯が主体となる。底径／口径比は0.38～0.51あり，0.41～0.47の範囲に集中する。器高／口径比は0.27～0.39で，Ａ類では0.27～0.34にまとまっている。

須恵器杯も少量ながら共伴する。口径の小さい一群で，底径／口径比が0.45～0.51あり土師器よりばらつきが少ない。器高／口径比は0.24～0.39で，１点が比較的大きく（図50－16），３点は器高が低い（図50－14・15・17）。小型の一群が主体になる点は土師器と同様である。

ＳＫ50出土遺物には器種の偏りがみられ，井戸祭祀に使用された土師器杯が大部分を占めている。これらはすべて内面黒色処理されている。計測図（図81②）をみると，ほとんどがＳＤ20のＡ・Ｂ類に対応することが分かる。器高／口径比は0.30～0.39に納まり，Ｂ類に近い。体部調整は，手持ちヘラケズリが70％，回転ヘラケズリも30％程度確認された。

以上の特徴から，１群土器は９世紀後葉～末葉に比定できる。

２群土器　ＳＫ42出土遺物（図63）を基準とし，ＳＤ15出土の一部もこれに含める。本群の特徴

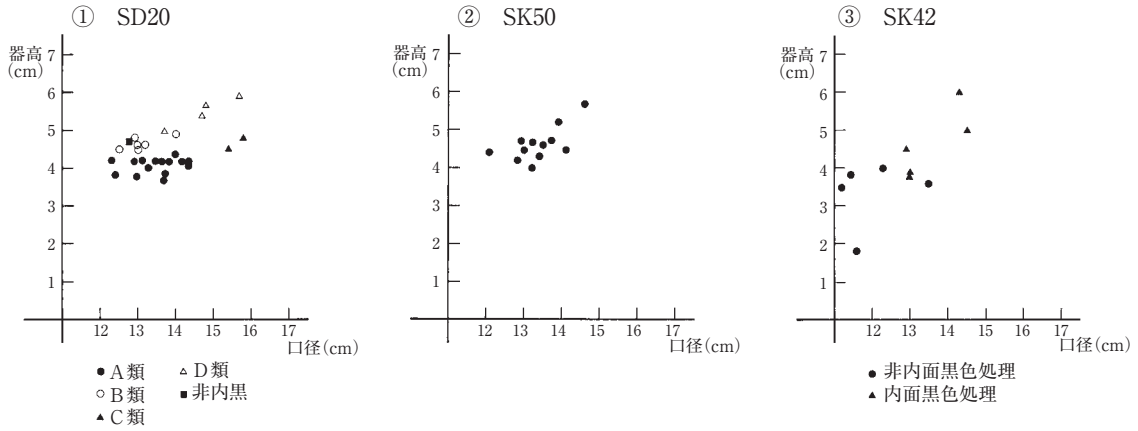


図81　土師器杯の測定値

は，土師器と赤焼土器が拮抗している点である。須恵器は伴っていない。器種は土師器杯･高台杯，赤焼土器杯・皿からなり，食膳具のみで構成されている。器種的な偏りは否定できず，本来須恵器が共伴する可能性は高い。

土師器杯はすべて内面黒色処理されており，ＳＤ20のＡ類に分類される例（図63－３・５）が多く，Ｂ類（同図４）・Ｄ類（１・２）が共伴する。類別と器形には相関があり，Ａ類は口端が外反し，Ｂ･Ｄ類は内湾気味になっている。計測値（図81③）は１群土器のピークと大差ないことが分かる。高台杯は体部の外反が弱く，高台は低い。

これに対し，赤焼土器は内面が黒色処理されず，色調は明褐色を呈している。底部に回転糸切り痕をそのまま残し，体部調整がみられない一群である。いずれも器高が低く，皿（図63－９）も共伴している。赤焼土器の特徴は，器としての大きさにあり，計測値に明瞭にみてとれる。つまり，口径が13㎝を超える例は１例のみで，明らかに土師器より小さくなっている。さらに皿を加えれば，その差は明確になる（図81③）。図63－９は底部が分厚く，硬質に焼かれている。「須恵質土器」などと呼称されるもので，須恵器窯で焼成されたと指摘されている土器である。２群土器は，赤焼土器の割合・皿の共伴などの特徴から，９世紀末葉から10世紀初頭に位置づけられる。

以上，高堂太遺跡の出土土器を１・２群土器に分けてその特徴を述べ，おおまかな年代観を与えておいた。そこで，土師器杯と赤焼土器を中心に会津盆地の類例と対比し，本遺跡土器群の位置づけを考えてみたい。

喜多方市鏡ノ町遺跡Ａ３群土器　ＳＫ53・ＳＸ08出土土器を基準とする。器種は土師器杯が主体を占め，これに土師器甕や須恵器長頸瓶・短頸壺，灰釉陶器碗・緑釉陶器段皿などがある。土師器杯はすべて内面黒色処理されており，器形は体部下半に丸みをもつ。体部調整は，ほとんどを回転ヘラケズリが占めている。口径は14～16㎝と大きく器高が比較的高い例も多い。器高／口径比は0.28～0.34（平均0.32）を測る。共伴する須恵器や灰釉陶器から９世紀第４四半期とされている。高堂太１群と類似するが，高堂太１群は口径が小さく，器高／口径比も小さい点，内面黒色処理されない杯が伴う可能性が指摘されることが異なっている。鏡ノ町Ａ３群が古相，高堂太１群が新相を示

すと考えられる。

鏡ノ町遺跡Ａ４群土器　ＳＫ20・ＳＸ03出土土器を基準とする一群で，土師器杯・高台杯・小型甕・甕，赤焼土器杯・皿・高台杯，黒色土器杯，須恵器広口瓶・壺などからなり，杯・皿の70％を赤焼土器が占める。土師器杯・赤焼土器杯とも口径が大きめである。皿は体部の丸みが弱く，外反するものも１点認められる。これらの土器群は，宮城県高崎遺跡井戸尻地区土壙出土土器などとの対比より９世紀末葉～10世紀初頭と推定された。本群土器は，赤焼土器の量から高堂太１群より後出することは明らかである。高堂太２群とは赤焼土器の出土量や高台杯の器形など相違点もあり，高堂太２群の皿が新相を示すと考えられることから，これに先行する一群と捉えている。

会津坂下町北遠面遺跡ＳＫ21出土土器　土師器杯・高台杯・鉢・甕・鍋，赤焼土器杯・皿・高台杯，須恵器甕・瓶類がある。数的には赤焼土器が土師器を凌駕し，須恵器の出土量はさらに少なくなる。赤焼土器杯は器高のある一群とない一群があり，後者が多い。赤焼土器皿は丸みをもった体部から内湾して口端に至る器形を呈し，口径は11㎝前後ある。上記の特徴は，共伴遺物を別にすれば，高堂太２群によく近似しており，同時期に位置づけることができる。ＳＫ21出土土器は，10世紀前葉～中葉に位置づけられている。

会津坂下町大江古屋敷遺跡ＳＫ01出土土器　土師器杯，黒色土器，赤焼土器杯・皿・高台杯・高台皿とともに青磁碗があり，赤焼土器が圧倒している。皿の占有率が高くなり，新たに高台皿が出現する。皿と高台皿の器形は若干異なっている。青磁碗の伝世期間もふまえて10世紀中葉の年代が与えられており，北遠面遺跡ＳＫ21より後出すると考えられる。高堂太２群とは赤焼土器の出現率がより高く，明らかに新しい様相を示している。

以上の土器群は，これまで９世紀後葉から10世紀中葉とされる資料であった。仮にこれらの土器群が，発展段階的に変遷すると考えれば，当地方の土器変遷における高堂太遺跡の位置づけは次のようになる。９世紀末葉（鏡ノ町Ａ３群→高堂太１群）→９世紀末葉～10世紀初頭（鏡ノ町Ａ４群）→10世紀前葉～中葉（高堂太２群・北遠面ＳＫ21）→10世紀中葉（大江古屋敷ＳＫ01）。

今回は土師器と赤焼土器の比率や杯の変遷に注目して以上の考察を行った。本来は共伴する須恵器や様式論的な対比が必要であるのは論を待たないが，高堂太遺跡の土器群は偏りが著しく，セット関係について言及できる資料とはいいがたかった。会津地方は該期の一括資料が比較的豊富な地域であるが，上記した状況は少なからず各遺跡でもみられており，遺構単位での様相はわずかずつ異なっている。こうした条件的な限界があったとはいえ，本遺跡出土土器の位置づけを行い，当地域における該期の土器変遷の一面は把握できたと考えている。（佐　藤）

第２節　平安時代の高堂太遺跡

高堂太遺跡における平安時代の遺構には掘立柱建物跡・溝跡・土坑などがある。掘立柱建物跡は北区に分布し，小規模な集落を形成している。溝跡や井戸跡を含む土坑は，主に南区から検出され

た。南区に建物跡の存在を想定することは容易ではあるが，その様相は明らかにされてはいない。ここでは，北区の集落跡を中心として，該期の遺構を概観していく。

北区の集落について

北区は，掘立柱建物跡を中心とし溝跡や土坑から構成される。溝跡出土の遺物から，９世紀後半に位置づけられる。時期決定が困難な建物跡もあるが，調査所見から大きな時間差は考えにくい。

建物跡のうち，ＳＢ28・30は周囲を巡る溝跡（ＳＤ36・37）とセットになって居住域を形成すると考えられる。溝跡は一方を開口しており，開口部は標高の低いほうに設けられている。これらの溝跡は，排水や除湿のために掘り込まれた遺構と考えられる。掘削時の土を内側に積み上げ，雨水等の流入を防止する施設と推定される。開口部が広がるのもここを水溜にしているためであろう。

こうした施設は，扇状地や沖積地などの低地に立地する遺跡で類例をみつけることができ，会津盆地における初現は古墳時代に遡ることが判明している。奈良・平安時代の遺跡では喜多方市鏡ノ町遺跡Ａ・鏡ノ町遺跡Ｂ・湯川村桜町遺跡を，弥生時代から古墳時代の類例として桜町遺跡・会津坂下町桶渡台畑遺跡・同町南原遺跡・竹原遺跡などで報告されている。桶渡台畑遺跡の例では，外周に巡る溝が，竪穴住居跡の排水溝と合流する構造になっている。竪穴住居跡と掘立柱建物跡の相違こそあれ，居住施設に排水溝が巡る点では共通し，こうした排水・除湿施設を伴う遺構が古墳時代からの系譜上にあると推定される。また，桜町遺跡では溝跡を伴う掘立柱建物跡があり，北陸系土器の流入とともに平地式住居の採用が指摘されている。このように，会津盆地の低地部に立地する集落では一般的な居住施設と考えられ，竪穴住居跡が伴う時期と掘立柱建物跡にとって代わられる時期とに大別できることになる。北陸地方では，弥生時代中期にすでに出現している。ところで，鏡ノ町遺跡ＡではＳＢ36・ＳＤ05をはじめとする当該遺構群を特殊な建物と想定している。しかし，遺跡が在庁官人の居館ないし郷倉に比定されていることから，遺構の性格も一般的な集落遺跡のそれと異なっているだろうことは容易に理解できる。したがって，こうした遺構のすべてを特殊に考える必要はない。

ＳＤ36・37のより外周には，ＳＤ32・34とした幅狭で直線的に延びる溝跡が存在する。これらの遺構は，軸線がほぼ一致することから，居住域を区画する可能性が高い。この溝跡の内側に畑などの空間が確保されたと推定することもできる。南区に分布する幅が狭い溝跡のいくつかは，こうした区画溝ではないかと想定している。

井戸跡について

高堂太遺跡からは，きわめて特異な井戸跡（ＳＫ50）が調査された。ＳＫ50は，底面に丸太刳り貫きの井戸枠を設置し，掘形上位を円形石組みにして構築されており，井戸部西側には石敷部が広がっている。小さく浅い井戸跡で，実際に使用できるか疑問も残る遺構である。年代は，底面より出土した土師器から９世紀後半に比定される。

会津盆地におけるＳＫ50の類例としては，会津若松市東高久遺跡ＳＥ18が最も類似しているようである。これは曲物の井戸枠を支えるために，掘形内に石を放射状に並べたもので，石は井戸枠の上面と底面に設置される。特に上面では複数段にわたって積まれていた。ＳＫ50とは，遺構上面の状況や，小型である点で共通している。ただし，東高久遺跡ＳＥ18は年代や下部構造など不明な点が多く，その取り扱いが難しい資料である。

福島県内における井戸跡を分析した渡辺一雄によれば，古代から中世の井戸跡は素掘りか曲物枠が設置された例が大部分であり，まれに板材を組んだ井桁や丸太刳り貫きの井戸枠・粘土枠がみられるようである。会津地方において，発掘調査された井戸跡は比較的多く，特に会津若松市と会津坂下町での調査例が目立つ。これまでのところ上記の指摘に沿った様相で検出されており，資料の増加に応じて分類項目を充実させている状況である。会津坂下町宮ノ北遺跡・三本木遺跡での分類に準拠すれば，ＳＫ50はⅣ類に含まれるが，その細分に丸太刳り貫きの井戸枠は設けられていない。また，三本木遺跡でⅣ類とされるＳＥ21・32とは規模や石組みの状況が異なっている。

墨書土器について

ＳＫ50の底面付近から土師器杯がまとまって出土した。これらは様々な出土状態を示していることから，祭祀行為に使用されたと考えられ，うち８点が墨書土器であった。判読可能な文字に「大井」２点と「井」・「真」各１点があり，「大井」は合せ文字風に書かれている。「大井」・「井」の有する意味は遺構の性格を反映していると考えられ，井戸祭祀に関わる遺物であることは間違いない。

「井」は，墨書土器の中で散見され，全国的に出土している。山形県生石２遺跡や富山市米田大覚遺跡のように，出土数の大半を占める例も報告されている。「大井」も千葉県北海道遺跡に類例がある。ただし，その意味合いは必ずしも「井戸」を意味するとは限らないようである。例を挙げるならば，中国で墓誌が発見された井真成と関連する可能性がある奈良県當麻町竹内遺跡の「井刀（井部？）」は人名・地名を示し，福井市高柳遺跡の「井万」は吉祥句と推定されている。また，平川南によれば魔除けの記号と考えられる例が少なくないようである。さらに，墨書土器ではないが，群馬県新田町中江田本郷遺跡の紡錘車に線刻された「井」や，神奈川県平塚市中原上宿遺跡の「井」焼印などは官職などの所属を表すと考えられている。これらの遺物は，井戸跡と無関係な場所から出土することも少なくないことから，井戸との関りに否定的な意見もあった。

しかし，高堂太遺跡における井戸祭祀に「大井」・「井」が用いられたのが偶然とは考えにくい。井戸跡から出土した例では，兵庫県姫路市豆腐町遺跡の「井」があげられる。「井」は「井」と同義語とされており，８世紀代の井戸跡を埋め戻した土層中から出土している。また，埼玉県川越市八幡前・若宮遺跡の井戸跡から帳簿木簡と共に「水」・「入卅」といった井戸の機能に関連した墨書土器も出土している。「井」が利水・治水に関係する用語として用いられる場合があったことは否定しがたく，井戸祭祀に使用されたこともあったと考えられる。

また，「井」と「真」に何らかのつながりがあるのかもしれない。県内の遺跡で「井」と「真」

が出土した例として，福島市御山千軒遺跡・会津若松市上吉田遺跡，県外の資料では生石２遺跡・米田大覚遺跡の他，岩手県下谷地Ｂ遺跡・千葉県久我台遺跡などがあげられる。以上の遺跡では別遺構や別層位から出土しているが，今後注目する必要がある。なお，墨書土器と同じ層から，墨痕の残る須恵器底部が出土した。転用硯の可能性があることを触れておく。　　（佐　藤）

第３節　中世の出土遺物

本節では，南区を対象に検討を行う。当該区は，方形館跡の中心部分が発掘調査され，多種・多様な遺物にも恵まれた。その中には，全国的に珍しい銅製提子・中国産染付皿・小皿を埋設した地鎮遺構が含まれている。ここでは，それらの成果に焦点を当て，記述を進めていきたい。

なお，検出された館跡の遺跡範囲は，大半が高堂太遺跡ではなく，古記録にも登場する下高額館跡に包括される（図２）。そのため，以下の記述では，館跡の名称を下高額館跡に統一する。

かわらけ・国産陶磁器・貿易陶磁器（図82）

南区の調査では，かわらけ１点，国産陶磁器15点，貿易陶磁器35点が出土している。これにより，１次調査の課題であった方形館跡の年代決定に具体的な根拠が得られたと言える。また，城館跡より古い中世前期の遺構群も検出され，それらの年代決定が併せて必要となった。以下では，編年的位置づけを行って，そのための検討材料を用意したい。

（１）貿易陶磁器

［白　磁］

碗　６点出土している。このうち５点が白磁碗Ⅴ類（図82－１～５）である。３は口縁部外面に縦線文，４は内面に片切り文･櫛描文が描かれている。残る１点は，玉縁口縁の白磁碗Ⅳ類（同図６）である。

四耳壷　１点出土している。肩部資料と推定される（７）。

［龍泉窯系青磁］

碗　３点出土している。このうち１点は，龍泉窯系青磁Ⅰ－２～４類である（８）。内面に劃花文がみられ，Ｄ期に比定される。残る２点は，龍泉窯系青磁Ⅳ類である（11・12）。Ｇ期に比定される。

［高麗産青磁］

袋物　１点出土している。肩部資料とみられ，細い沈線が確認できる（９）。

碗　１点出土している。器壁の薄い体部資料である（10）。

［染　付］

皿　11点出土している。すべて景徳鎮系民窯の小野Ｂ$_1$群である（15・16）。15は内面草花文で，外面無文である。２次被熱痕跡が認められる。16は同類が他に９点ある。すべて完形品である。外面に宝相華唐草文，内面に十字花文が描かれている。

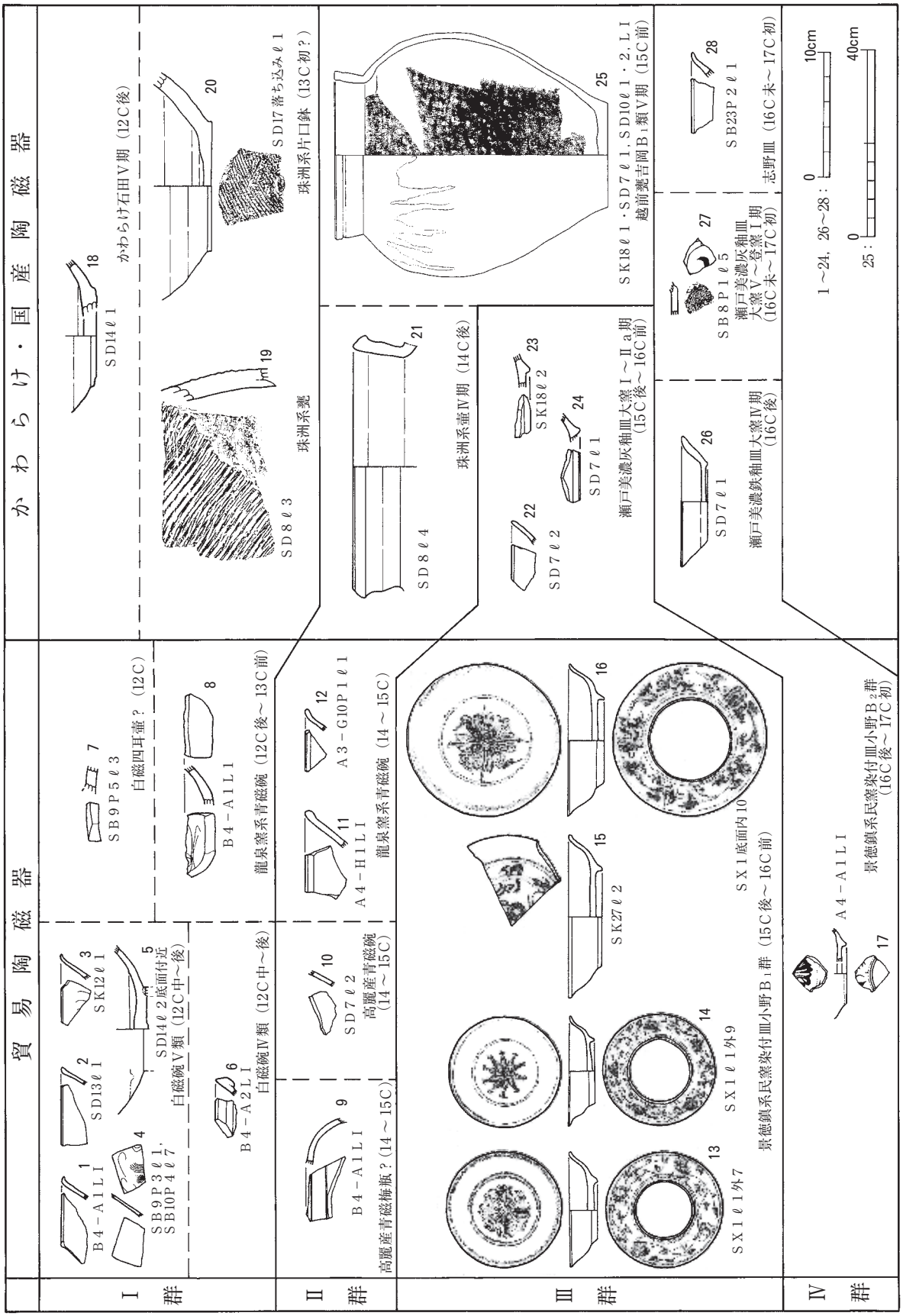


図82　かわらけ・国産陶磁器・貿易陶磁器編年図

小皿　13点出土している。すべて景徳鎮系民窯の製品である（13・14・17）。13のタイプは５点の完形品があり，小野Ｂ$_1$群に分類される。外面に宝相華唐草文，内面に十字花文がみられる。14のタイプも５点の完形品があり，同じく小野Ｂ$_1$群に分類される。文様構成は13のタイプと類似し，内面十字花文の種類が違う。17は小野Ｂ$_2$類である。文様構成は13のタイプと類似する。しかし，粗悪化が著しく，新しい様相が認められる。

（２）かわらけ・国産陶磁器

[かわらけ]

ロクロ成形のものが，１点出土している（18）。器形は底部が分厚く，体部下端に丸みがある。調整痕は，表面の摩耗のため観察できない。福島県考古学会中近世部会編年（1996・1997）の３～４期に比定される。

[須恵器系中世陶器]

片口鉢　１点出土している（20）。珠洲系ではあるが，胎土が粗く，珠洲産ではないとみられる。口縁部側が欠損し，底部外面に静止糸切り痕が観察できる。

壷　１点出土している（21）。直立気味の口縁部片である。端部外面側は三角形状をなす。胎土の特徴から，珠洲焼と考えられる。Ⅳ期に比定される。

甕　６点出土している（19）。すべて同一個体の胴部片である。珠洲系ではあるが，胎土に海綿骨針がびっしり混入し，珠洲製品とは明らかに特徴が異なる。調整痕は，外面に左斜め方向の平行タタキメ，内面に無文の当て具痕が観察できる。

[瓷器系陶器]

甕　１点出土している（25）。器高60㎝弱を測る大型品である。越前焼甕Ｂ$_1$類とみられる。肩が膨らむ胴部に，ほぼ直立する口縁部が付く。口縁部は，外面に沈線，内面の対応する位置に窪みが巡る。また，胴部外面には丁寧なナデ調整が加えられ，内面は無文当て具痕が観察される。時期は，口縁部が吉岡編年Ｖ期，胴部がⅣ期の特徴に合致することから，Ｖ期の古い段階に比定できる。

[施釉陶器]

灰釉皿　４点出土している。このうち３点は，大窯Ⅰ～Ⅱａ期の瀬戸美濃焼で（22～24），同一個体の可能性がある。もう１点は，大窯Ｖ期～登窯Ⅰ期の瀬戸美濃焼である（27）。底部に回転糸切り痕が観察できる。

鉄釉皿　１点出土している（26）。大窯Ⅳ期の瀬戸美濃焼である。窯道具のトチン痕跡がはっきり残っている。

長石釉皿　１点出土している（28）。志野焼の口縁部資料である。２次被熱しており，器面にひびが入っている。

（３）編　年

以上の内容を，編年図にとりまとめた（図82）。年代観は，次のように整理される。

Ⅰ群土器……12世紀後半～13世紀前半（鎌倉時代）

Ⅱ群土器……14世紀後半～15世紀（南北朝～室町時代）
Ⅲ群土器……15世紀後半～16世紀前半（戦国時代）
Ⅳ群土器……16世紀後半～17世紀初頭（織豊期）

これをみると，Ⅰ群土器とⅡ群土器の間には，150年前後の空白がみられ，Ⅱ～Ⅳ群土器は連続していることが判る。なお，Ⅳ群土器は後述する遺構期区分との関係で，さらに古段階（16世紀後半）と，新段階（16世紀末～17世紀初頭）に細分する。（菅　原）

石臼について（図83）

石臼は８点出土した。内訳は茶臼２点（上臼１点・下臼１点），粉引き臼（以下「粉臼」と呼称する）６点（上臼３点・下臼３点，うち下臼１点は報文未掲載）である。これらの多くは２～３個に割れた状態で出土し，接合して完形になったものもある。出土箇所に注目すれば，溝跡や土坑から廃棄された状態で出土したほか，柱穴の根固石に転用された例もある（図９－12・図37－１）。このうち図68－７（上臼）と図37－３（下臼）がセット関係と思われる。ここでは，出土した石臼の特徴を述べ，これらが提起する問題について考えてみたい。

茶　臼　茶臼の機能面径は上臼・下臼とも20㎝程度と小さい。また，上臼は挽木孔の周辺に装飾をもち，下臼は精巧な目が切り込まれているなど，粉臼とは明瞭に区別される。特に下臼の目はきわめて細く鋭利な刃物で引かれたと推定される。茶臼上臼も含めた，これ以外の石臼の目が３～５㎜あるのに対し，明らかに異なった技術で製作されているのが分かる。また，下臼が茶褐色を呈する細粒閃緑岩を素材とするのに対し，それ以外の石臼が灰色・黒色を呈するデイサイトや安山岩などを用いており，趣を異にしている。石材鑑定の結果によれば，会津地方では産出しない石材とのことであり，搬入品と考えられる（柴田徹氏の御教示による）。

粉　臼　粉臼の大きさは，径が31～32㎝，機能面径が30～31㎝の範囲におおむね納まる。上臼のふくみ幅は比較的深く2.5～3.3㎝を測る。下臼では最大７㎝あるが，これは図38－１が極端に片減りしているためで，すり合わせ部を水平にして計測すれば，2.0～3.5㎝と上臼と大差ない。信州に多いとされる「もっこり形」に近い。14～15世紀代に比定される郡山市荒井猫田遺跡の石臼は，径27～36㎝とばらつきが大きく，また，ふくみが低いのと比較すれば，本遺跡における石臼の選別には何らかの基準が存在したと想定できる。素材となった石は，すべて会津地方でまかなえる石材である。多孔質で，石臼には適した素材といえる。

高堂太遺跡で最も注目されるのは，「目立て」である。出土した石臼は，その全てが主溝により分画された空間に副溝を充填している。６分画が４点，８分画が２点存在する。６分画の石臼は副溝が５～６本あり，副溝は整った間隔で直線的に配置されている。１例のみだが，「こぼれ目」も確認される（図68－７）。これに対し８分画の場合には，主溝は器面を等分割せず，その境界も不明瞭になっている。副溝も折れたり曲線的で，間隔も一定していないなど，乱雑な印象を受ける。ただし，副溝の屈曲点は顕著に磨耗したすり合わせ部近くに位置している。この地点で溝の方向が

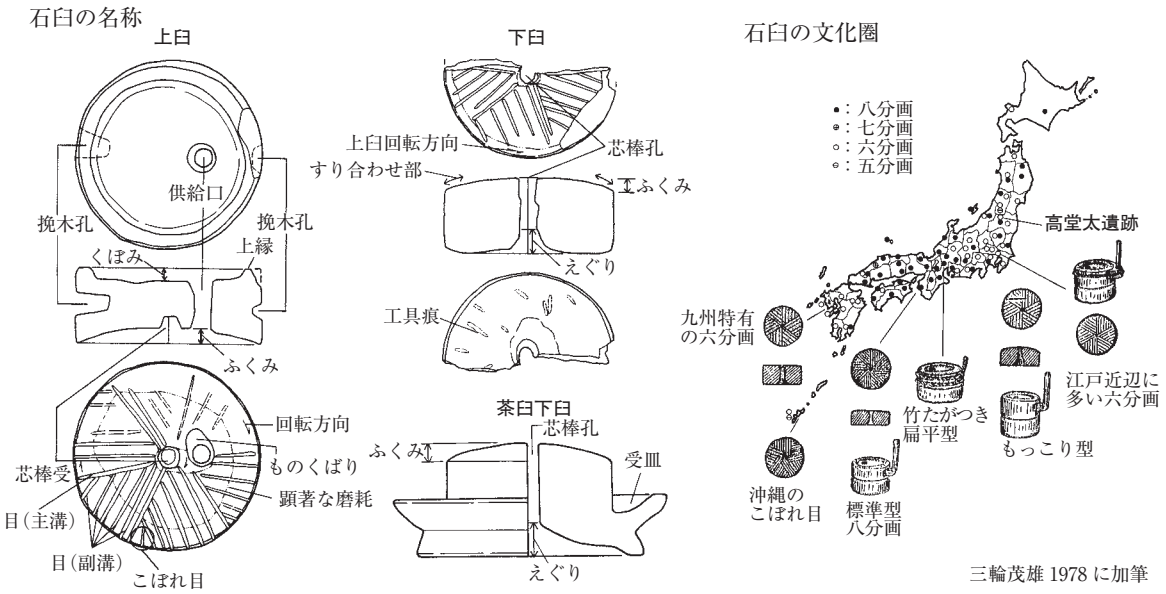


図83　石臼の名称と文化圏

変化するのは現在の石臼でもみられる製作法であり，意図的に製作された可能性も考慮された。そこで挿図中に磨耗範囲を表現しておいた。

三輪茂雄の集成によれば，「目の分画」に地域性が指摘されている（三輪1987）。現代の石臼では６分画は関東地方から東北地方にかけて卓越するとされており，８分画は畿内を中心とする西日本に多く分布し，北陸地方もおおむねこの分布圏に含まれている。新潟県から秋田県までの日本海側の地方では，６分画と８分画が混在するとされる（図83右図）。高堂太遺跡出土石臼は，数的にも技術的にも６分画が主流となるのは間違いなく，会津地方で６分画が採用されるのは中世に遡る可能性が高くなった。しかし本遺跡では，技術的に稚拙とはいえ８分画の石臼があり，新潟県や山形県に類似した様相をもつことも明らかとなった。また，現代の東北地方では特殊な「こぼれ目」もみられた。本遺跡での石臼のありかたは，北陸地方に近いという地理的な環境を反映しているとともに，石臼の地域性が成立する以前の状況を示している可能性が高い。

また，出土したすべての石臼が分画されている点も本遺跡の特殊性を際立たせている。県内の中世城館から出土した石臼は，茶臼を除けば，その大半が放射状に目が切られたもので，分画された粉臼の割合は１～２割にすぎない。こうした状況は，伊達市梁川城など戦国大名クラスの居城でも確認される。なかには郡山市木村館跡や同市中村館跡・三春町堀ノ内遺跡など相当数出土しているにもかかわらず，分画された資料が見出せない遺跡も少なくない。この点はすでに，日下部善己により指摘されて久しく（日下部1981），調査例が増した現在においてもこの現象は変わらない。城館跡から出土する石臼について，火薬製作の道具とする考えもあるが（相原1982），その検証は十分とはいえない。日下部の指摘は，県内における中世から近世初頭の特徴として提示できそうである。これに対し，高堂太遺跡は特異な様相といえる。その理由に，年代差や対象物・所有者の階層などが考えられるが，石臼の編年研究が進んでいない現状では，それぞれの是非を論じる根拠に乏しい。ここでは所有者に由来する可能性を指摘しておく。　　（佐　藤）

第４節　下高額館跡の時期区分と遺構変遷

本節では，下高額館跡の時期区分と遺構変遷の検討を行う。

時期区分

（１）大別区分

まず，事実報告をもとに，方形館跡より古い中世前期の遺構と，それに伴う遺構を分離する。前者に関しては，平安時代のものとの区別が難しく，確実なものに限定する。

[方形館跡より古い遺構]

溝　跡６条　ＳＤ６・13・14・17・25・29

土　坑４基　ＳＫ12（井戸跡），ＳＫ13・43・44

[方形館跡に伴う遺構]

建物跡23棟　ＳＢ１～６・８～23・29

溝　跡９条　ＳＤ１（堀跡），ＳＤ７～11・15・16・18（内部区画溝）

土　坑６基　ＳＫ８・９・30・36（井戸跡），ＳＫ18・27（廃棄坑）

地鎮遺構１基　ＳＸ１（地鎮遺構）

（２）遺構所見の整理

次に，方形館跡に伴う遺構所見を整理する。

[遺構の重複関係]

以下の，６例が認められる。そのうち，ａは主殿の変遷にあたる。なお，矢印の向きは，古→新の前後関係を示している。

ａ：ＳＢ18→ＳＢ１→ＳＢ19　ｂ：ＳＢ11，ＳＤ８・15→ＳＤ10　ｃ：ＳＤ11→ＳＤ７

ｄ：ＳＤ11→ＳＢ20→ＳＢ21　ｅ：ＳＢ14→ＳＢ15　ｆ：ＳＢ13→ＳＫ18・ＳＤ７

[その他の所見]

以下の３点が指摘できる。

ｇ：ＳＤ８の堆積土最上層が，ＳＢ12の遺構検出面を覆っている。

ｈ：ＳＤ７，ＳＫ18・27は，多量の焼壁を含む同一層で埋められている。また，共伴した陶磁器・石臼・石鉢には，明らかな２次被熱痕跡（変色・煤の付着）が観察できる。

ｉ：ＳＤ７－ＳＤ10－ＳＫ18間で，越前焼甕（図82－25）の接合関係がみられる。また，ＳＤ７－ＳＤ10間で石鉢（図38－２）の接合関係がみられる。

以上から，主殿には３時期の変遷があり（ａ），存続期間中に多量の焼壁が生じる状況が発生したこと（ｈ），その前に，館内部が深い区画溝で仕切られる時期があったことが判る（ｃ）。また，層位関係・遺物の接合状況から，共存関係をおさえられる遺構がある（ｇ・ｉ）。

（３）遺物の共伴状況

次に，遺構変遷に年代の目安を与えるため，遺物の共伴状況を確認する（図82）。

[方形館跡より古い遺構]

ＳＤ13…Ⅰ群：白磁碗Ⅴ類（２）　ＳＤ14…Ⅰ群：白磁碗Ⅴ類（５）・かわらけ（18）

ＳＤ17…Ⅰ群：珠洲系片口鉢（20）

このことから，方形館より古い遺構の年代は，12世紀後半～13世紀前半に求めることができると思われる。

[方形館跡に伴う遺構]

ＳＢ９…Ⅰ群：白磁四耳壷（７）　ＳＢ９・10…Ⅰ群：白磁碗Ⅴ類（４）

ＳＤ８…Ⅰ群：珠洲系甕（19），Ⅱ群：珠洲系壷（21）

ＳＤ７…Ⅱ群：高麗産青磁碗（10）・越前甕Ｂ$_1$類（25），Ⅲ群：景徳鎮系染付小皿（13・14タイプ）・瀬戸美濃灰釉皿（22・24），Ⅳ群（古）：瀬戸美濃鉄釉薬皿（26）

ＳＫ27…Ⅲ群：景徳鎮系皿（15）　ＳＸ１…Ⅲ群：景徳鎮系染付皿・小皿（13・14・16）

ＳＢ23…Ⅳ群（新）：志野焼（28）　ＳＢ８…Ⅳ群（新）：瀬戸美濃灰釉皿（27）

このうちⅠ群土器は，古い遺構からの混入品とみられ，Ⅱ～Ⅳ群土器が，方形館の存続期間を示していると考えられる。したがって，大枠としての年代は，14世紀後半～17世紀初頭に求められる。

（４）遺構期の設定

以上を勘案して，Ⅰ～Ⅳ期の遺構期を設定したい。土器群との対応関係は，次のとおりである。

Ⅰ期…Ⅰ群土器　Ⅱ期…Ⅱ群土器　Ⅲ期…Ⅲ～Ⅳ群土器（古）　Ⅳ期…Ⅳ群土器（新）

このうちⅣ期は，下限資料に恵まれず，終末年代は不明である。

各期の内容

ここでは，各期の内容を具体的に解説する。なお，時期不明の遺構が少なからずあり，館中央と南辺は，今後の発掘調査が予定されている。したがって，暫定的な試案であることを，あらかじめ断っておく（図84）。

Ⅰ　期（館成立前）

ＳＤ６・13・14・17・25・26，ＳＫ12・13・43・44で構成される。他にも，多数の小穴・溝跡が該当するとみられ，遺物の集中傾向から，調査区北西部に中心範囲が想定される。居住者は，貿易陶磁器を定量保有している点で，比較的富裕な階層に求められる。

当該期は，Ⅱ期に成立する館の外側まで遺構分布が広がっている（ＳＤ６）。しかし，密度は極端に希薄であり，ほとんどがその内部に収まっている。Ⅱ期とは，約150年前後の空白がみられるため，自然地形の制約が時代を超えて影響したと考えられる。

Ⅱ　期（館Ⅰ期）

ＳＢ11～14・18・29，ＳＤ１・８・11・15・16で構成される。このうちＳＢ11・ＳＤ８は，共存

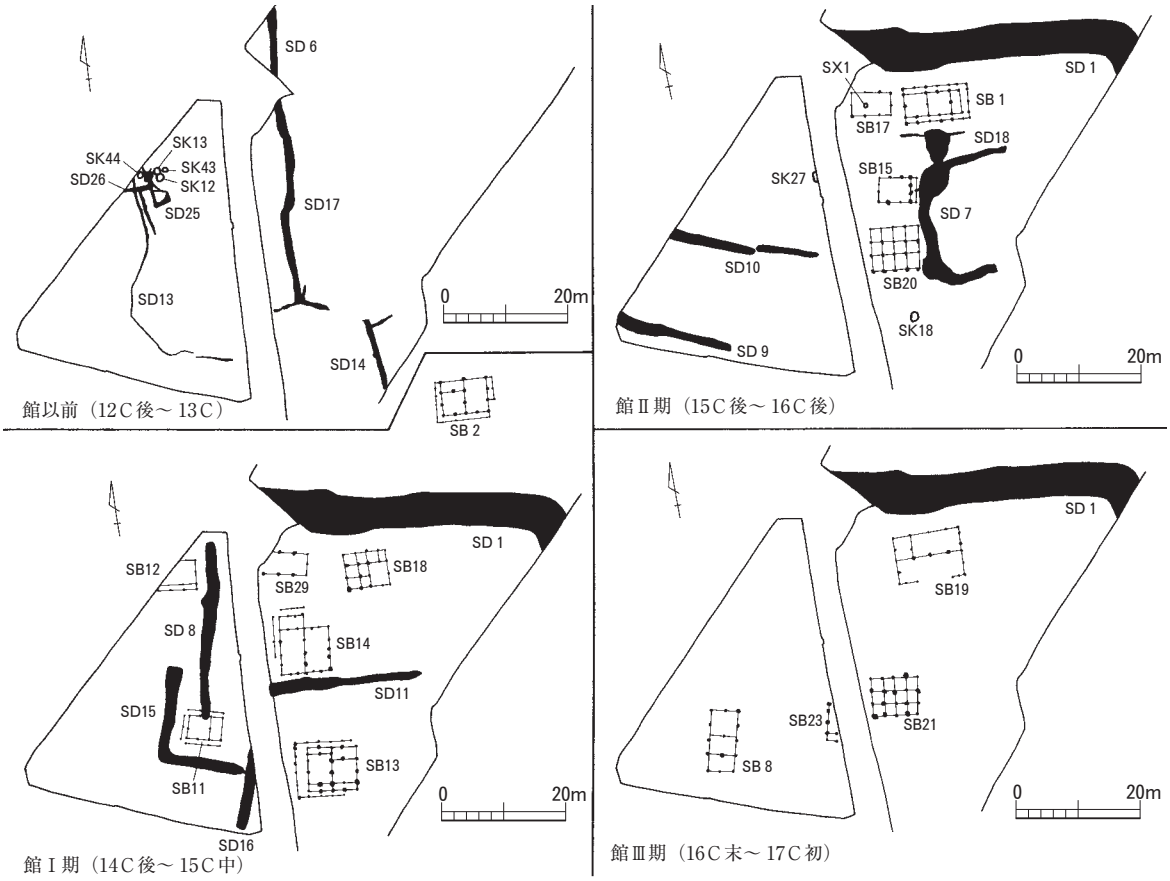


図84　方形城館跡の変遷

が困難であり，今後時期細分を行う必要がある。ＳＢ11は，他に比べて柱穴が小さく，特別の性格を有していたのかも知れない。

当該期は台形状に堀が巡らされ，方形館が成立する。館内部は，深い区画溝でさらに複数のブロックに分割されており，計画的な建物配置が行われている。今のところ確認できるのは，次の３単位である。

Ａ）ＳＤ８・11内……ＳＢ14・18・29

Ｂ）ＳＤ11・16内……ＳＢ13

Ｃ）ＳＤ11・15内……ＳＢ11

主殿（ＳＢ18）は，後続期に比べると貧弱で，他に匹敵する規模の建物跡（ＳＢ13・14）が存在している。したがって，際だった優位性は認められず，ブロックごとの相対的な自立性が読み取れる。現地を見学した高橋充氏からは，「まるで街道沿いの町割りのようだ」という感想を頂いた。

一方で，全体の建物配置の設計は，このブロックをまたいで行われ，北辺堀跡に沿ってＳＢ18（主殿）－ＳＢ29－ＳＢ12が東西方向に並び，館の推定中軸線に乗って，ＳＢ29－ＳＢ14－ＳＢ13が南北方向に並ぶ。ＳＢ13・14は，正方形基調で規模が大きく，東に開放した板塀を巡らす点で，共通性が認められる。また，堀跡外部のＳＢ２は，ＳＢ13と規模・構造が類似する。このことが，同時存在とした根拠である。類例は，後述するように麻生館遺跡で確認できる。

Ⅲ　期（館Ⅱ期）

ＳＢ１・15・17・20，ＳＤ１・７・９・10・18，ＳＫ18・27，ＳＸ１で構成される。

当該期は，館の盛期に位置づけられる。主殿（ＳＢ１）は，３面に縁をもつ格式の高い構造に変貌し，正面には池（ＳＤ７・18）を伴う庭園が営まれる。内部を仕切る溝（ＳＤ９・10）は浅くなり，主殿前面から排除される。しかし，建物配置はⅡ期の原則が踏襲され，ＳＢ１（主殿）－ＳＢ17が東西方向に，ＳＢ17－ＳＢ15－ＳＢ20が南北方向に並ぶ。

もう１つ，当該期は廃絶時の特異な状況が特筆できる。池・土坑に多量の焼壁が廃棄され，館が火災に遭ったか，意図的に焼却処分されたことを示唆している。後者だとすれば，ＳＸ１はそのことに関連した地鎮痕跡とも推測されるが，染付の年代が半世紀ほど古く，現時点では無関係とみておく。

Ⅳ　期（館Ⅲ期）

ＳＢ８・19・21・23，ＳＤ１で構成され，他にも複数の建物跡が伴うはずである。当該期は，館の衰退期，もしくは再編期に位置づけられる。

主殿（ＳＢ19）は，身舎に接して，南側に板塀が巡らされる。池は既に埋め立てられているが，南辺中央が大きく開き，庭園とのセット関係は維持されたとみられる。しかし，簡素化したことは否めない。また，区画溝が無くなっている。

建物配置をみると，南北方向では，Ⅲ期のＳＢ20がＳＢ21に建て替えられている。しかし，東西方向に，該当する建物跡が見当たらない。また西側には，細長い南北棟（ＳＢ８）がある。

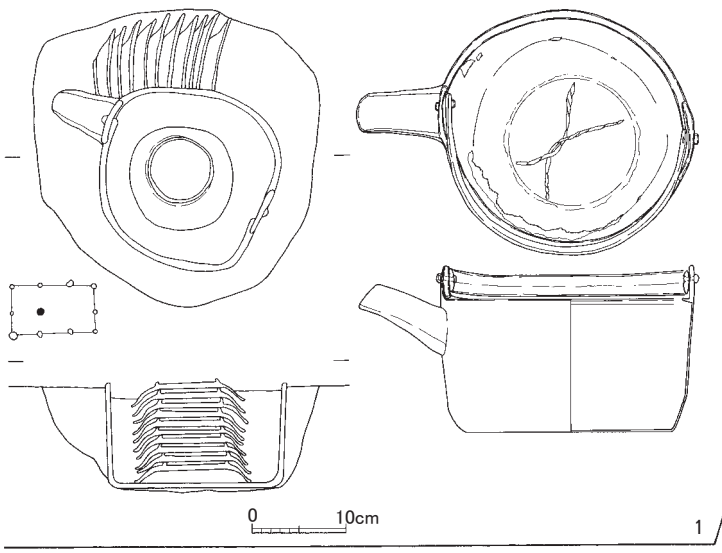
その後，18世紀後半には，館跡地が農地へ改変されたことが，１次調査で得られたＳＤ２の所見から判明している。

第５節　地鎮遺構について

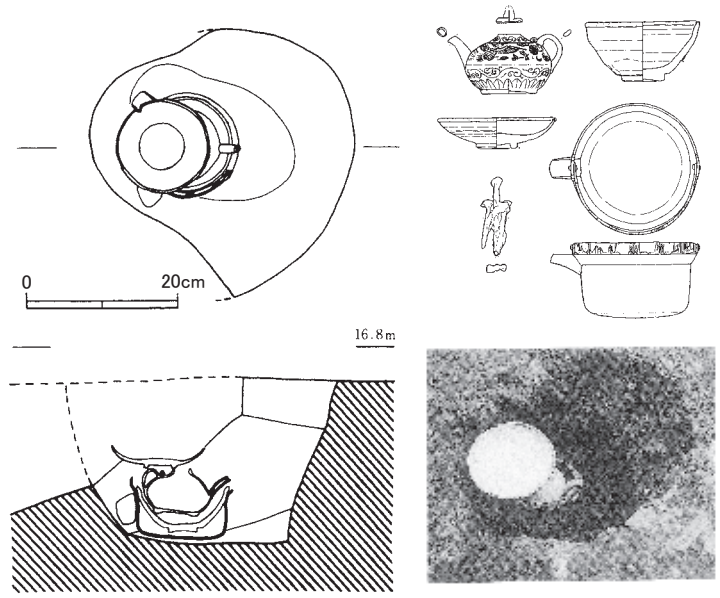
今回の成果では，館Ⅱ期に比定される地鎮遺構の発見が，関係機関の注目を集めた（図85－１）。主殿に並列した小規模な東西棟（ＳＢ17）に伴うもので，向かい合う柱穴を結んだ交点に位置していた。銅製提子内に，染付皿10枚が伏せた状態で納められ，その脇に染付小皿10枚が横倒しの状態で重ねられていた。

以下では，各地の類例をみていきたい。

最も類似した例は，神奈川県鎌倉市笹目遺跡に求められる（同図２）。銅製提子内に，上から，白磁水注の蓋・皿・水注，天目茶碗が重ねられた状態で検出され，敷地拡張に伴う地鎮遺構と推定されている（笹目遺跡発掘調査団1991・大河内勉1997）。年代は15世紀前半に比定され，本遺跡より古く位置づけられる。また，内容物は異なるが銅製提子に注目すると，内部に太刀部品を入れ，鏡がその上に置かれた事例が，富山県富山市金屋南遺跡で発見されている（同図５）。これは，旧河道跡で発見され，河川祭祀に伴う可能性が指摘されている（小林高範2001）。

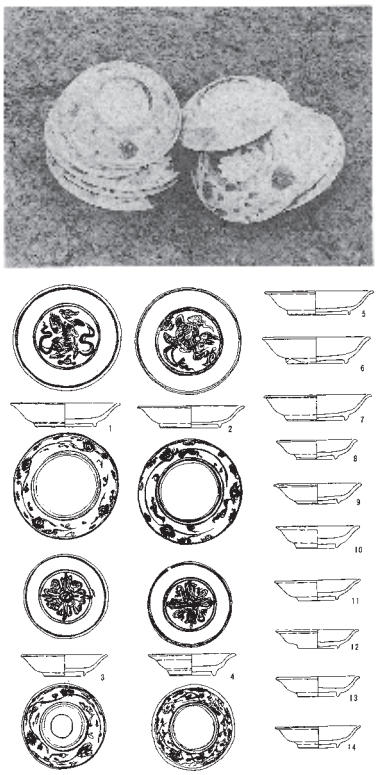


1



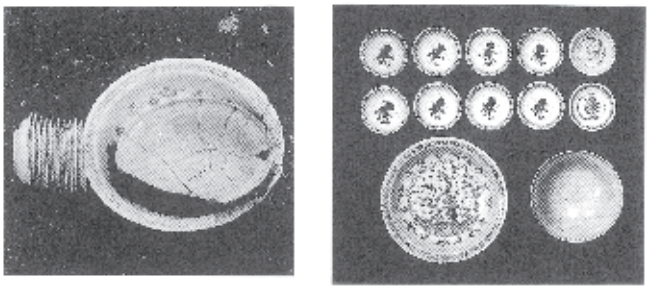
出土遺物は上から、白磁皿・白磁水注・天目茶碗・銅製銚子の順。左は釘（銹化ブロック）
（笹目遺跡調査団1991より）

2



（白根市教育委員会1985より）

3



（岩田1997より）

4

提子出土状況　提子の中には、太刀部品23点が入れられ、洲浜秋草双鳥鏡がその上に置かれていた。提子の径19センチ、高さ８センチ。

（小林2001より）

5

1　福島県喜多方市高堂太１号地鎮遺構（15Ｃ後～16Ｃ前）
2　神奈川県鎌倉市笹目埋納遺構（15Ｃ前）
3　新潟県新潟市（旧白根市）馬場屋敷１区一括遺物（15Ｃ後～16Ｃ前）
4　福井県一乗谷第42次埋納陶磁器（16Ｃ中）
5　富山県富山市金屋南（南北朝）

図85　地鎮遺構の類例

一方，銅製提子を伴わない事例では，新潟県新潟市馬場屋敷遺跡に類例が確認できる（同図３）。詳細は不明であるが，大小各７枚が伏せた状態で一括出土しており（白根市教育委員会1985），小皿はＳＸ１とまったく同類で，皿の文様構成も近似する。したがって，年代は同じ15世紀後半～16世紀前半と考えられる。さらにもう１つ，著名な福井県福井市一乗谷遺跡の類例をあげておく（同図４）。染付大皿と青磁鉢が入れ子にされ，その脇に，横倒しの状態で染付小皿10枚が重ねられている（岩田隆1997）。小皿の埋納方法は，ＳＸ１と同様である。年代は16世紀中頃に比定されている。

以上を要約すると，まず年代は，15世紀前半～16世紀中頃の限られた期間内にまとまる。しかし，今のところ，容器・内容物・埋納方法が完全に一致する例は見当たらない。また，馬場屋敷遺跡の類例から，ＳＸ１の染付皿・小皿は，阿賀川経由で搬入された可能性が高いと思われる。

いずれにせよ，全国的に珍しい発見であり，今後の資料増加を待ちたい。

第６節　方形館の構造と麻生館遺跡との比較

次に，今回判明した方形館の構造を整理し，近接する麻生館遺跡との比較を行う。

下高額館跡の構造

（１）概　要

【周囲の環境】 館の東側に長勝寺，その境内に板碑が認められる。後述するように，同寺院は下高額館を構えた渡邊左京進長勝が，至徳元（1384）年に自らの名を付して建立したという記録が文献史料に残っている。また，現在の下高額集落が南に接し，この景観は館が営まれた頃と基本的には

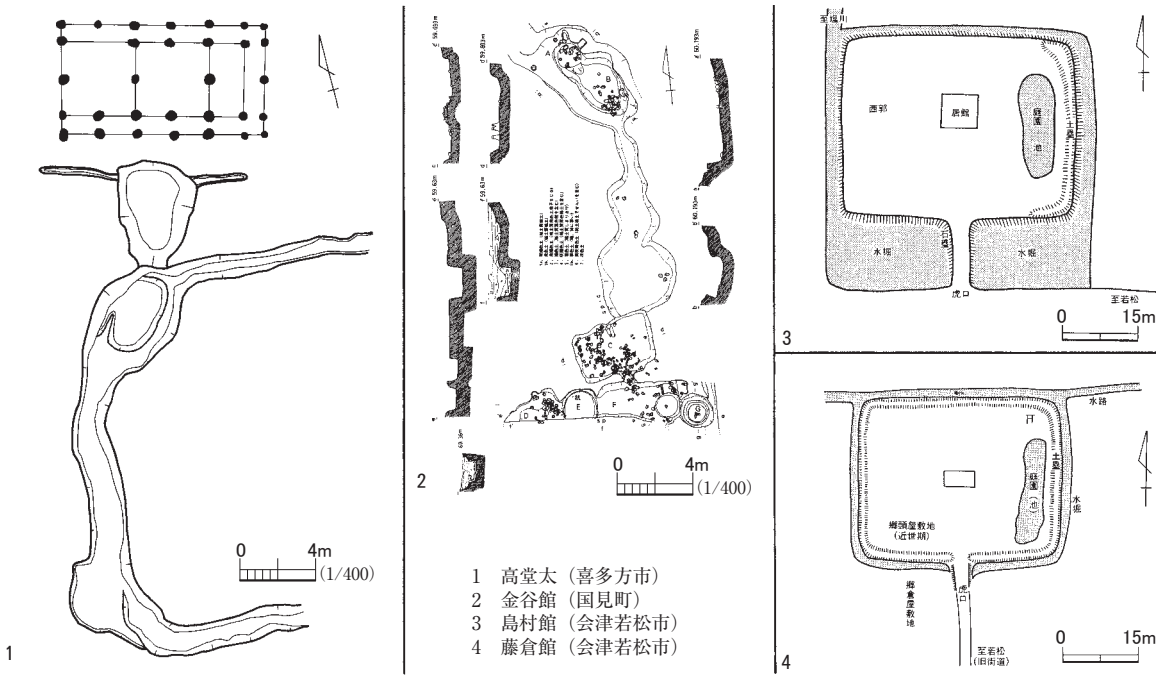


図86　池跡の類例

変わっていないと推定される。つまり，館は「集落と一体的に存在した」（坂井秀弥1997）可能性が高い。

【平面形・規模】　全体の平面形は，台形状を呈している。この不自然な形態は，自然地形に規制されたものと考えられる。現時点では，北辺約70m，東辺約60m，南辺約105m，東辺約57m，平面積5,000㎡の規模が復元できる。

【堀・土塁】　館の周囲には断面逆台形の箱堀が巡り，北辺東半部では，上幅5.5m，下幅2.5m，検出面からの深さ1.5mの規模が判明している。また，崩落土の様子から，堀の内側には低い土塁が併走していたと推定され，現地形の観察でも東辺南側に高まりとして残っている。

（２）内部施設

【出入り口】　まだ検出されていない。しかし今回の所見から，ＳＤ８・16が途切れる位置周辺に，北・南出入り口の存在が想定される。仮にその推測が正しければ，南出入り口の位置は，南辺中央にあたることになる。どちらも３次調査以降で，確定するはずである。

【施設配置】　基本配置が固定化されている。主殿は，北辺ぎわで３時期に変遷し，西側に東西棟，南側に正方形基調の建物が直列配置される。北辺ぎわの東西棟は，堀の蛇行に合わせて軸線をずらしている（図84）。また西半部には南北棟が多く，さらに外側には井戸跡の集中がみられる。主殿前面～東側には，池を伴う庭園が営まれ（館Ⅱ～Ⅲ期），県内の他の方形館跡にも類例が認められる（図86）。とくに金谷館跡は，土坑状の池が２基連結し，さらに外側へ水が流れ出る点で，基本構造の一致が指摘できる（福島県教育委員会1980）。

【内部空間の分割】　館Ⅰ期は，深い区画溝で，内部空間が複数のブロックに分割されている。同Ⅱ期は，この規制が弱まる。

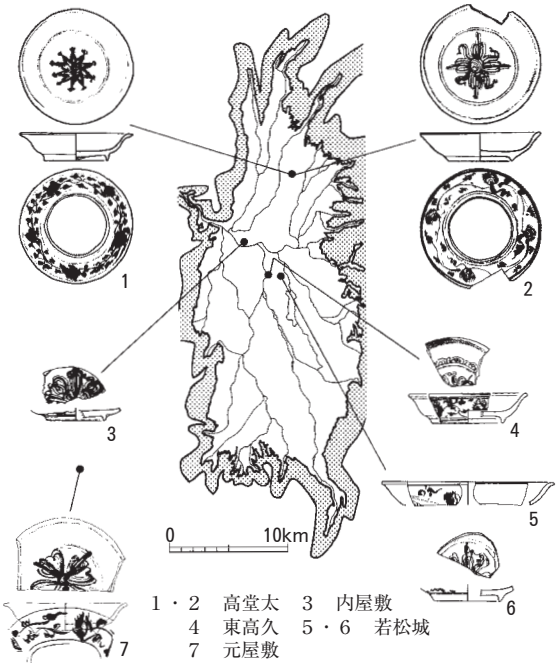


図87　染付皿の類例分布

【主殿の変遷】　身舎面積はほとんど変更せず，平面形と付属施設を変化させることで，格式を高めている（図88右下）。

【存続期間】14世紀後半～17世紀初頭の，南北朝期～織豊期に存続したと考えられる。

【遺物の質・量】　国産陶磁器・貿易陶磁器の量に，比較的恵まれている。越前焼大甕は，会津地方で初の確実な出土例であり，地鎮遺構に伴った景徳鎮系染付皿は，５遺跡目の確認例となる（図87）。また，城館跡に伴うかわらけが１点も確認できないのは，特徴的であると言える。

麻生館遺跡との比較

麻生館遺跡は，本遺跡の南約3.5kmという近

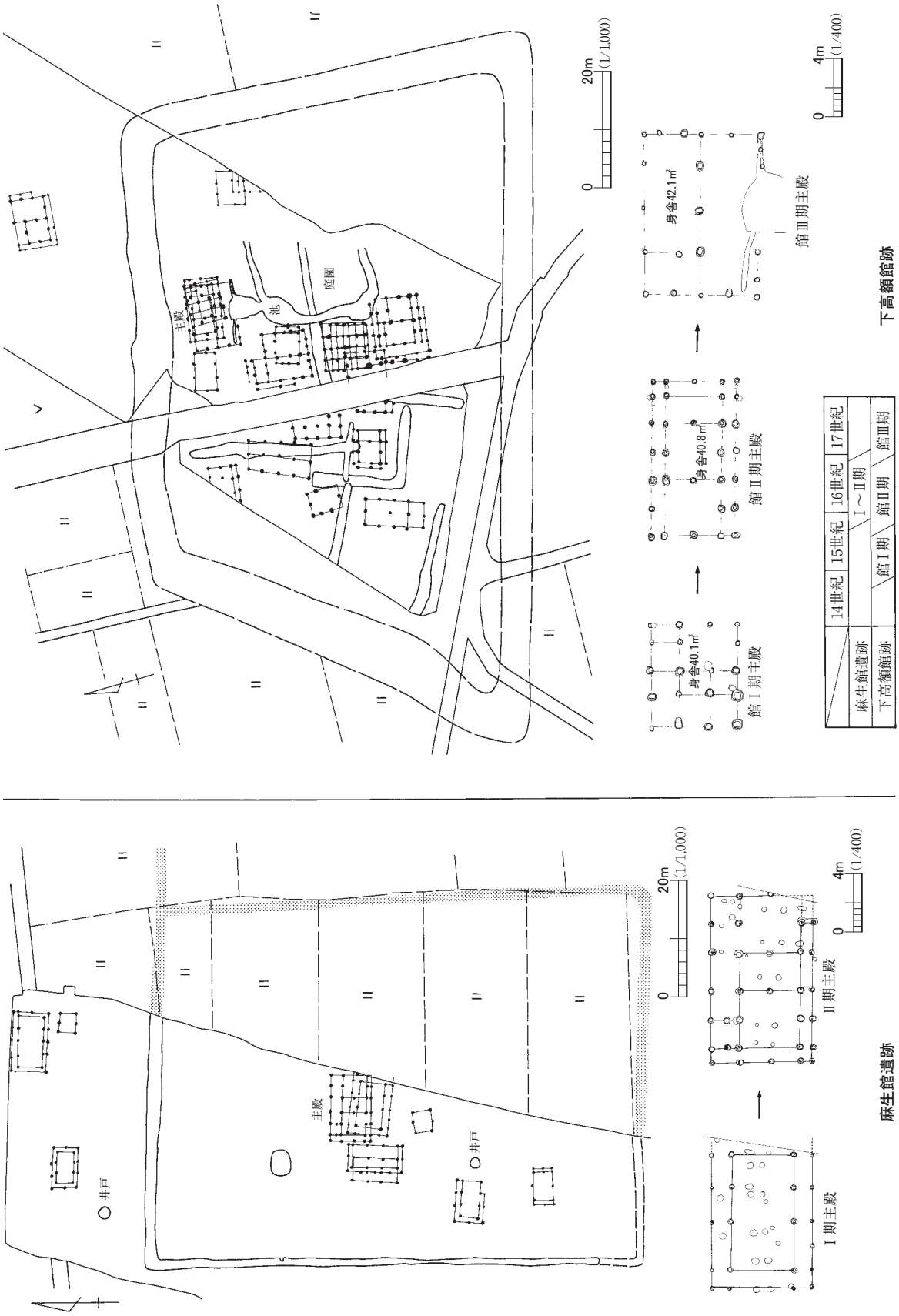


図88　麻生館遺跡・下高額館跡比較

距離に所在する。会津地方では，全体構造と遺構変遷が判明している数少ない方形館跡の１つであり（(財）福島県文化振興事業団2002)，下高額館跡とは，一定の併存期間がみられる（麻生館Ⅰ～Ⅱ期：下高額館Ⅱ～Ⅲ期)。ここでは，その間を対象に相違点を要約する（図88)。

A）平面形に違いがみられ（縦長長方形－横長台形)，面積は近似している（5,300㎡－5,000㎡)。堀の幅・深さは，下高額館跡の方がしっかりとしていて土塁を伴い，防御的性格が強い。

B）麻生館遺跡は，主殿がほぼ中央にあり北半部が空閑地なのに対し，下高額館跡は，主殿を含み堀・土塁の手前まで建物配置が行われる。また麻生館遺跡は，主殿の西・南側に直列の建物配置が行われていない。

C）麻生館遺跡は，主殿に南面して池が設けられず，広い空閑地になっている。しかし，報告書ではここに庭園が営まれていたと推定されており，東側未調査区に池の存在した可能性も考えられる。その場合，両者は類似した構造となる。

D）麻生館Ⅱ期・下高額館Ⅱ期の主殿は，平面形・構造が比較的近似する。また，堀外部に建物配置が行われる点も一致している。

以上から両館跡は，全体規模，主殿の平面形・構造，堀の外部に建物配置が行われる点が類似する一方で，内部の建物配置にはかなり違いが認められた。また麻生館遺跡は，遺物の量が極端に少ない。それらが何に起因するものなのか，今後の課題である。

第７節　文献史料と発掘調査成果の整合性

下高額館跡には，造営年代・城主名の記録された文献史料が残っているが，その信憑性を，疑問視する向きもあった。次に，発掘調査成果との整合性をみていきたい。

文献史料にあらわれた下高額館跡

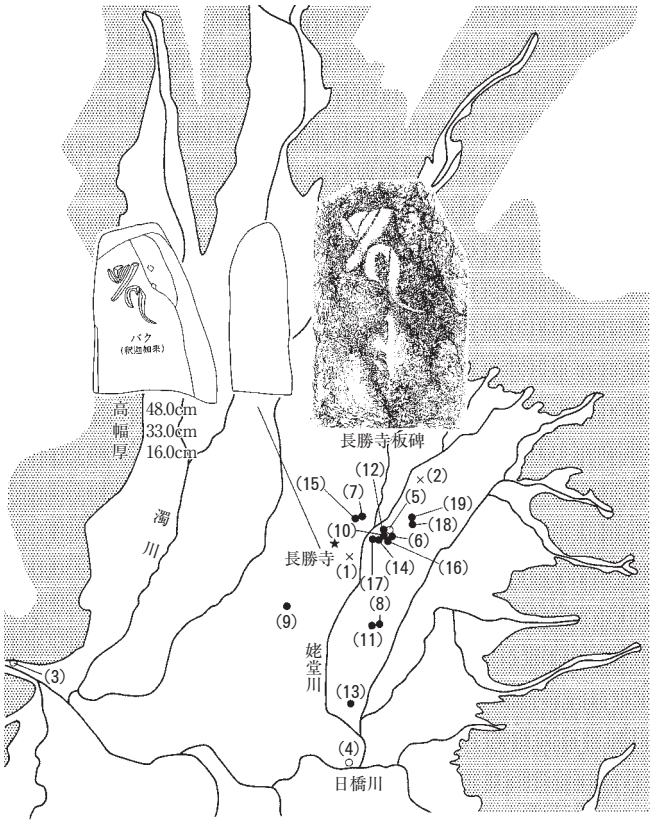
下高額館跡には，以下の関連記録が認められる。

A：『新編会津風土記』　至徳年間（1384～1387)，耶麻郡十二箇村を領有する蘆名氏家臣の渡邊左京進長勝が，同郡下高額村に館を構える。また，至徳元（1384）年には，村内に自らの名を寺号として長勝寺を建立した。

B：『貞山公治家記録』　天正17（1589）年，葦名氏旧臣の十二村助左右衛門が，伊達政宗から会津北方十二村を安堵された。

補足すると，Aの長勝寺は下高額村に現存し，境内には板碑が残っている。板碑は，年号部分が欠損しているが，至近距離に14世紀後半（Ⅳ期：1361～1396）の板碑群がみられ（図89－６～19)，それもほぼ同じ頃のものとみられる（柳内壽彦2000)。この年代観は，史料に記録された長勝寺の建立年代（1384）と合致する。

また，Bの「十二村」は，Aの「十二箇村」と同一で，十二村助左右衛門も，下高額村に館を構



番号	西　暦　（年　号）	所　在　地
（１）	1297年（永仁5年3月11日）	喜多方市豊川町高堂太字村中
（２）	1301年（正安3年7月23日）	喜多方市熱塩加納町熱塩字熱塩795
（３）	1333年（正慶2年）	喜多方市高郷町揚津字赤岩
（４）	1349年（貞和5年7月3日）	喜多方市塩川町吉津字沖
（５）	1352年（観応3年3月9日）	喜多方市関柴町豊芦字村中1711
（６）	1361年（廷文6年2月9日）	喜多方市関柴町豊芦字村中1735
（７）	1361年（廷文6年2月）	喜多方市関柴町西勝字三島
（８）	1363年（貞治2年4月28日）	喜多方市塩川町三吉字北屋敷
（９）	1364年（貞治3年8月1日）	喜多方市豊川町一井字家北
（10）	1364年（貞治3年8月17日）	喜多方市関柴町豊芦字村中
（11）	1367年（貞治6年3月18日）	喜多方市塩川町三吉字北屋敷
（12）	1367年（貞治6年8月13日）	喜多方市関柴町豊芦字村中
（13）	1367年（貞治6年8月28日）	喜多方市塩川町小府根字仲田
（14）	1368年（貞治7年4月2日）	喜多方市関柴町豊芦字村中
（15）	1369年（応安2年3月11日）	喜多方市関柴町西勝字三島
（16）	1369年（応安2年3月11日）	喜多方市関柴町豊芦字村中
（17）	1376年（永和2年7月）	喜多方市関柴町豊芦字村中
（18）	1395年（応永2年9月27日）	耶麻郡北塩原村大字北山字柿木田
（19）	1396年（応永3年）	耶麻郡北塩原村大字北山字前畑

×Ⅱ期：1287 ～ 1308 年
○Ⅲ期：1312 ～ 1353 年
●Ⅳ期：1361 ～ 1396 年

造立年号のある板碑の所在地

図89　周辺の板碑

えたと推定される（喜多方市史編纂委員会1995）。渡邊氏と十二村氏の関係は不詳であるが，同一系譜である可能性が指摘されており（喜多方市史編纂委員会1995），十二村家は，現在も館跡の南東隣接地に断絶することなく続いている。

今回，判明した館の存続年代（14世紀後半～17世紀初頭）は，その２名に関する文献記録と一致した。したがって，記述内容の信憑性と共に，両氏の連続性がほぼ裏付けられたと考えられる。

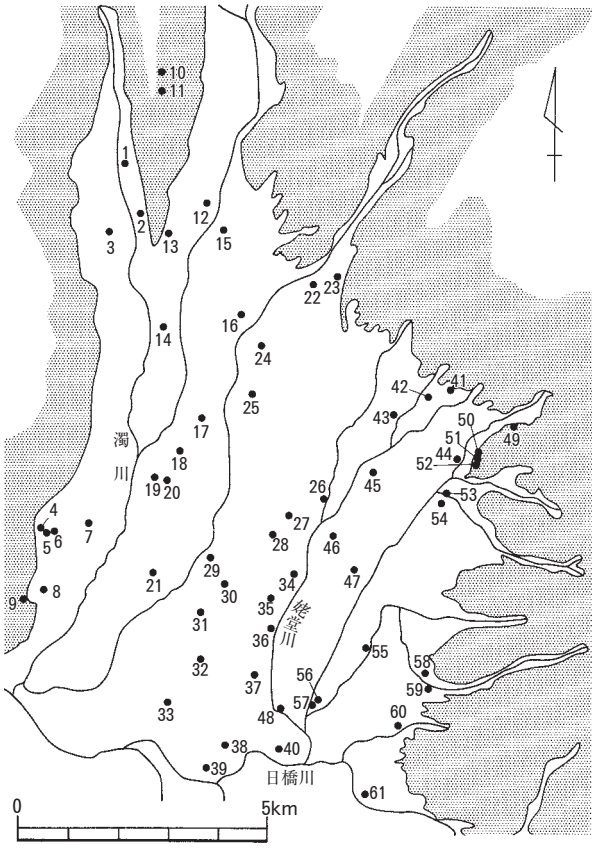
なお，文化12（1815）年の村絵図には，館跡が水田へ帰し，十二村家は現在地に移動していた様子が描かれている。それでも，館の跡地には「北屋敷」の小字名が確認され，この時点ではまだかつての存在が認識されていたようである。しかし，明治15（1879）年の丈量図ではその地名も消え，地域住民から館の存在は忘れ去られていた。

歴史的背景

最後に，歴史的背景を探ってみたい。

図90・91は，『福島県の中世城館跡』（福島県教育委員会1988）を基礎データに，平地城館跡の分布と変遷を整理したものである。これをみると，下高額館跡の所在する会津盆地北部には，60箇所を超える平地城館跡を確認することができ（図90），それらの造営場所は，盆地西部から東部へ順次移動して，最終的には全体に拡散した動きが読み取れる（図91）。

そのうち，下高額館跡が成立した14世紀後半に焦点を当てると，姥堂川流域の狭い範囲に造営場



文献：Ａ会津古墨記　Ｂ新編会津風土記　Ｃ会津鑑　Ｄ会津旧事雑考
Ｅ耶麻郡誌　Ｆ慶徳村旧記
Ｇ伊達治家記録　Ｈ伊達天正日記
Ｉ蘆名家分限録　Ｊ蘆名家御旧臣見分録
Ｋ新宮雑葉記　Ｌ異本塔寺八幡宮長帳
Ｍ檜原軍物語

遺跡名	文献	城主・年代など
1（添田館）		
2　鷲田館		
3（譲屋館）		
4　慶徳城	A・B・C・E	天正年中(1573－1591)、蘆名の臣、慶徳善五郎が住む
5　新館	F	天正年中(1573－1591)、武藤和泉守が築く
6　荒神館		
7　谷地ノ城	F	承安元年、河内守吉実が住んだという
8　新宮城	A・B・C・K	建暦２年(1212)、新宮時連が築いたという
9　駿河館	B・K	永享の頃(1429－1440)、西海枝駿河守が築く
10（針生館）	A・C	建長６年(1254)、山川七良重隆が築く、その子孫針生氏が住む
11（畠中館）		
12（吉志田館）	A・B・C	蘆名の臣、瓜生筑後重次が住む
13　青山城（東城）	A・B・C	加納庄領主、佐原氏(加納殿)が住んだという
14　新助屋敷	A・B	弘長の頃(1261－1263)、真壁備中元勝が築く、天正期、穴沢新助が住む
15（高畠館）	A・B	伊沢権頭俊行のち神保小次郎長保が住んだという
16（下岩崎館）	A・B・C	天福の頃(1233)、飯島筑後信之が築いたという
17　坂井館	A・B・C	元亀・天正の頃(1570－1591)、小荒井阿波が住む
18（塚原館）	B	天正期(1573－1591)、蘆名四天の宿老富田美作の嫡子富田将監が住む
19（太郎丸西館）	A・B・C	永禄11年(1568)に、太郎丸河内守盛次が築いたという
20（太郎丸東館）	B	天正(1573－1591)の時代、太郎丸掃部が住む
21（長尾館）	A・B・C	新宮五郎左衛門宗連が築いたという
22（上岩崎館）	A・B・C	大永の頃(1521－1528)、遠藤助兵衛(大隅)が築く
23（大沢館）	B	蓮沼信濃某が住んだという
24（稲村館）	B	天正の頃(1573－1591)まで、蘆名小太郎盛保が住むという
25（小田付館）	A・B・C	佐瀬木和種常、五十嵐善次郎冒勝が住む
26（中明館）	A・B	菅沼伊賀某が住んだという
27（下勝館）	B	大原伊賀守某が住んだという
28（下高額館）	A・B・C	至徳の頃(1384－1386)、渡辺左京進長勝が住むという
29（菅井館）	A・B・C	康安２年(1362)、三橋太郎義通が築いたという
30（渋井館）	A・B・C	天文９年(1540)、池田備中政宗の二男、勘次郎俊甫が築く
31　柴城	A・B・C・I	応安４年(1371)、柴城民部重行が築く
32　沖館	B・C・J・N	山口沙耶道光が住む
33　貝沼館	B・J	三橋太郎義道が康安２年(1362)に築く
34（太田館）	B	天正年中(1573－1591)、蓮沼備中某が住んだという
35　鏡ヶ城	A・B・H	至徳元年(1384)に平田大隅が築いたという
36　新井田館	A・B・J	建仁３年(1203)に新井田太良重国が築き、のち田辺左衛門義秀が住んだ
37　上江館	B	粟村弾正清政が天正年間(1573－1591)住む
38　下遠田館	A・B・C	三橋備前重定、二男刑部重治が住む
39　新屋敷	B	
40　小十郎館	B	天正17～18年に片倉小十郎(1589－1590)が築城果たせず、長井に移る
41　赤館	B	網取城主、松本勘解由の臣中ノ目阿賀が住んだという
42　新井館	B	松本勘解由の臣、新井善五郎が住んだという
43　一盃館	B	松本勘解由の臣、一盃大輔が住んだという
44　山口屋敷	A・B・C	天文年中(1532－1554)、山口弥太良実村が築く、羽曽部を氏とした
45（中里館）	B	佐藤河内某が住んだという
46（布流館）	B	手代木某が住んだという
47　南館	B・D・L	中ノ目城、中ノ目式部大夫盛光が天正年中(1573－1591)住む
48（別符館）	A	佐野平内エ門が住む、別符は荘園関連地名
49（佐原館）		
50（館）		
51（館）		
52（館）		
53（高柳北館）	A・B	野部清吾某が住んだという
54（高柳南館）	A・B	坂井雅楽が住んだという
55　常世館	B・L	常世大炊助が永禄年間(1558－1569)住む
56　丹波館	A・B・C	上窪村柵、宇都美丹波が住む
57（上窪南館）	B	葛西右馬介の館か
58　南屋敷	A・B・C	間鍋備中が住む
59　小滝館	A・B・J	小滝右衛門慰義直が徳治年間(1306－1307)に築く
60　深沢館	B	
61　金川館	B・C・J	石井修理維人が永仁年間又は永保年間に築くという

図90　平地城館跡の分布（1）

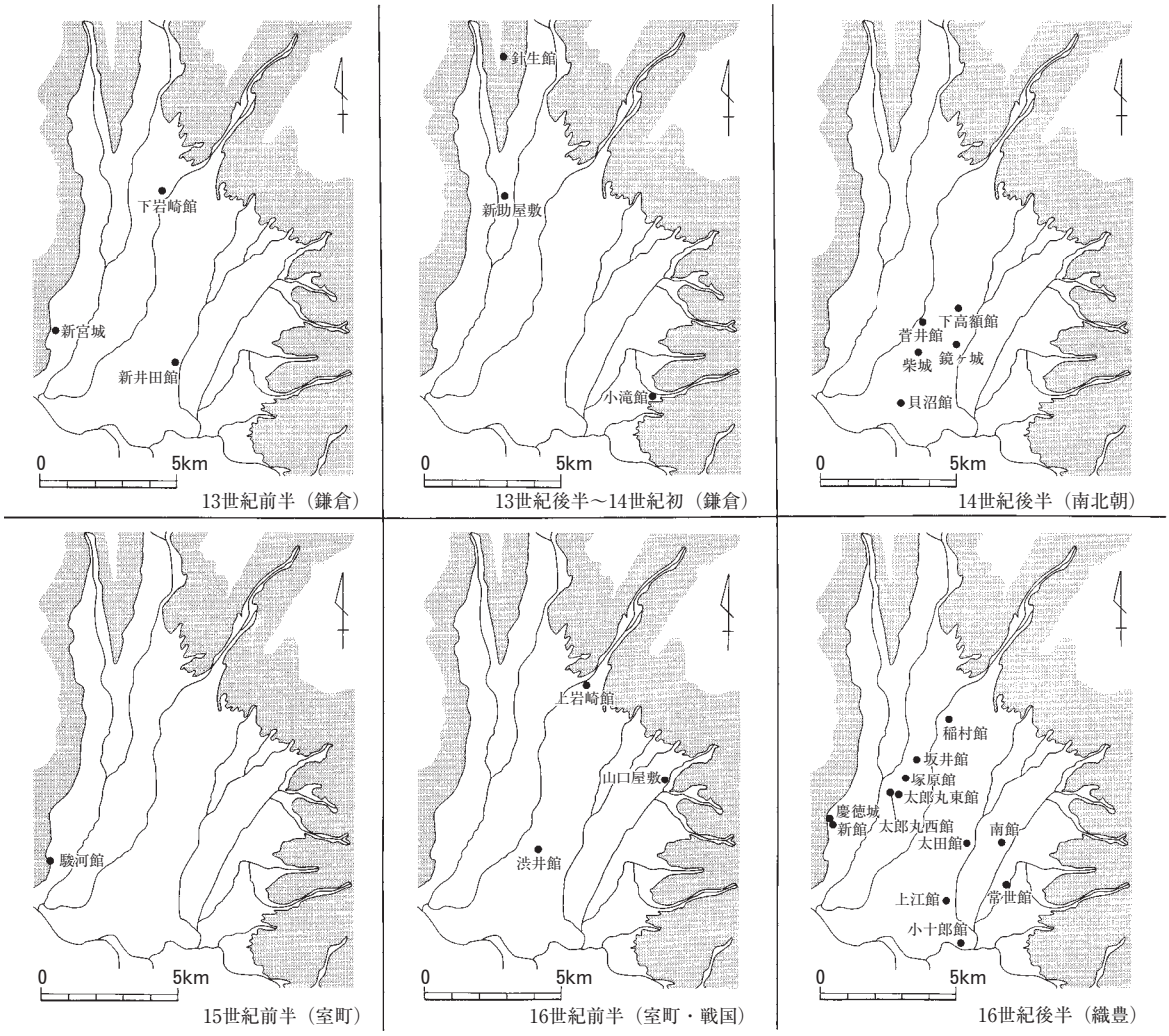


図91　平地城館跡の分布（2）

所が限定され，鏡ヶ城跡の半径３㎞以内に，下高額館跡・菅井館跡・柴城跡・貝沼館跡が集中することが指摘される（図90－28・29・31・33・35）。したがって，一帯に何か特別な事情が発生したことが推測され，このことは，ほぼ同位置で14世紀後半（1361～1396）の板碑が集中的に造立された現象と符号している（図89）。

この14世紀後半は，ちょうど葦名直盛が会津へ下向した頃である（佐藤健郎1986）。また，鏡ヶ城は葦名氏四大家老の筆頭，平田氏累代の居城とされ，他の４城館跡に比べて格段に大きな規模を備えている（塩川町教育委員会2001）。そうすると，下高額館跡は，会津地方における葦名支配が本格化する中で，鏡ヶ城の支城の１つとして成立した可能性が指摘できるのではないだろうか。もちろん，この仮説は文献に依拠したものであり，今後，批判的に検証されなければならない。

また，館Ⅱ期の廃絶状況にも注目したい。これは，16世紀後半という戦国時代末期の年代を考慮すると，奥羽仕置に伴う破却（伊藤正義2001）の可能性も選択肢の１つにあげられる。

３次調査以降で，さらに検討材料が増えることを期待してまとめに代えたい。　　（菅　原）

引用・参考文献

福島県郡山市教育委員会1975『中村館　中世館跡調査報告書』

小学館1976『世界陶磁全集14　明』

三輪茂雄1978『ものと人間の文化史　臼』法政大学出版局

福島県教育委員会1980「金谷館跡」『伊達西部地区遺跡発掘調査報告』

日下部善己1981「城館跡出土の石臼類について（予察）―福島県内城館跡発掘調査の成果より―」『福島考古第22号』

相原秀郎1982「城館跡出土の石臼―石臼付着物から見た火薬生産の痕跡―」『福島考古第23号』

上田秀夫1982「14～16世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究 NO. 2』

小野正敏1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究 NO. 2』

森田勉1982「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究 NO. 2』

福島県教育委員会1983『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅵ　御山千軒遺跡』

白根市教育委員会1985『馬場屋敷遺跡等発掘調査報告書』

会津若松市教育委員会1986『若松城三の丸跡発掘調査報告書』

佐藤健郎1986「蘆名氏の会津支配」『福島県の研究第２巻　古代中世編』清文堂

福島県教育委員会1988『福島県の中世城館跡』

会津坂下町教育委員会1990『大江古屋敷遺跡』

笹目遺跡発掘調査団1991『笹目遺跡発掘調査報告書』

平川南1991「墨書土器とその字形―古代村落における文字の実相―」『国立歴史民俗博物館研究報告第35集』

会津坂下町教育委員会1992『阿賀川地区遺跡発掘調査報告書　北遠面遺跡』

福島県教育委員会1992『東北横断自動車道遺跡調査報告15　木村館跡』

井上喜久夫1993『尾張陶磁』ニューサイエンス社

田中照久1994「越前焼の歴史」『越前古陶とその再現』出光美術館

喜多方市史編纂委員会1995『喜多方市史４　考古・古代・中世　資料編１』

村田晃一1995「宮城郡における10世紀前後の土器」『福島考古第36号』

山元信夫1995「中世前期の貿易陶磁」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編

続真一郎1995「中世後期の貿易陶磁」『概説　中世の土器・陶磁』中世土器研究会編

吉岡康暢1995『中世須恵器の研究』吉川弘文館

中近世部会1996「かわらけ編年の再検討 - 11世紀から19世紀 -（その１）」『福島考古第37号』

中近世部会1996「かわらけ編年の再検討 - 11世紀から19世紀 -（その２）」『福島考古第38号』

岩田隆1997「一乗谷出土の埋納陶磁器」『貿易陶磁研究 NO.17』

大河内勉1997「鎌倉の陶磁器埋納事例」『貿易陶磁研究 NO.17』

塩川町教育委員会1997『鏡ノ町遺跡Ａ』
菅原計二1997「東北における陶磁器埋納」『貿易陶磁研究 NO.17』
鶴巻康志1999「中世後期　陶磁器類の組成と変遷」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編
山中雄志1999「ロクロ土師器を中心とする会津地方の土器様相（前編）」『福島考古第40号』
山中雄志2000「ロクロ土師器を中心とする会津地方の土器様相（後編）」『福島考古第41号』
喜多方市教育委員会2000『高堂太地区遺跡発掘調査報告書Ⅰ　東上川原遺跡』
柳内寿彦2000「会津の板碑文化の時期区分」『阿部正光君追悼集』阿部正光君追悼集刊行会
会津若松市教育委員会2000『若松北部県営ほ場整備発掘調査報告書Ⅱ』
伊藤正義2001「破城と破却の風景－越後国「郡絵図」と中世城郭」『城破りの考古学』吉川弘文館
郡山市教育委員会2001『荒井猫田遺跡（Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区）―第12・13次発掘調査報告―』
小林高範2001「鏡や太刀が提子に入って出土」『2001発掘された日本列島』文化庁編
塩川町教育委員会2001『鏡ヶ城跡測量調査報告』
(財)福島県文化振興事業団2002『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告１　麻生館遺跡』
平田禎文2003「陸奥のかわらけ－(1) 福島県」『中世奥羽の土器・陶磁器』東北中世考古学会編
八重樫忠郎2003「奥羽における輸入陶磁器の受容」『中世奥羽の土器・陶磁器』東北中世考古学会
会津若松市教育委員会2005『東高久遺跡』
(財)福島県文化振興事業団2006『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告６　高堂太遺跡（下高額館跡を含む)』

現地説明会の様子（平成18年９月30日開催）